日蓮大聖人御書全集

衆生身心御書

しゅじょうしんしんごしょ

新版
2040
～
2047

衆生身心御書

建治期

衆生の身心をとかせ給う。その衆生の心にのぞむとてとかせ給えば、人の説なれども、衆生の心をいでず。かるがゆえに、随他意の経となづけたり。譬えば、さけもこのまぬおやの、きわめてさけをこのむいとおしき子あり。かつはいとおしみ、かつは心をとらんがために、かれにさけをすすめんがために、父母も酒をこのむよしをするなり。しかるを、はかなき子は、父母も酒をこのみ給うとおもえ

り。

提謂経と申す経は、人天のことをとけり。阿含経と申す経は、二乗のことをとかせ給う。華厳経と申す経は、菩薩のことなり。方等・般若経等は、あるいは阿含経・提謂経にたり。あるいは華厳経にもにたり。これらの経々は、末代の凡夫これをよみ候えば仏の御心に叶うらんとは行者はおもえども、くわしくこれをろんずれば、己が心をよむなり。己が心は本よりつたなき心なれば、はかばかしきことなし。

法華経と申すは、随自意と申して、仏の御心をとかせ給う。仏の御心はよき心なるゆえに、たといしらざる人も、この経をよみたてまつれば利益はかりなし。麻の中のよもぎ、つつの中のくちなわ、よき人にむつぶもの、なにとなけれども心もふるまいも言もなおしくなるなり。法華経もかくのごとし。なにとなけれどもこの経を信じぬる人をば、仏のよきものとおぼすなり。

この法華経において、また機により時により国により ひろむる人により、ようようにかわりて候をば、等覚の

ほけきょう　もう　ずいじい　もう　ほとけ　みこころ　せつ　たも
ほとけ　みこころ　ぜん　こころ　しらざる　ひと
きょう　よ　りやく　りょう　あさ　なか
つつ　なか　じゃ　ぜん　ひと　むつぶ　もの
こころ　しん　ふるまい　ことば　なお
ほけきょう　ごとし　なに　きょう　しん
ひと　ぜん　おぼす
ほけきょう　き　とき　くに
ひろむる　ひと　様々　変　そうろう　とうがく

菩薩(ぼさつ)までもこのあわい(間)をばしらせ給(たま)わずとみえて(見)候(そうろう)。まして末代(まつだい)の凡夫(ぼんぷ)は、いかでかはからい(計)おおせ(果)候(そうろう)べき。

しかれども、人(ひと)のつかい(使)に三人(さんにん)あり。一人(ひとり)はきわめて(極)小賢(こざかしき)。一人(ひとり)ははかなく(果無)もなし、またこざかしからず(小賢)。一人(ひとり)はきわめてはかなく(果無)、たしかなる(確)。この三人(さんにん)に、第一(だいいち)は(過)あやまちなし。第二(だいに)は、第一(だいいち)ほどこそなけれども、すこしこざかしきゆえに主(しゅ)の御(おん)ことば(言葉)に私(わたくし)の言(ことば)をそうるゆえ(添)に、第一(だいいち)のわるきつかい(悪使)となる。第三(だいさん)は、きわめてはかなく(果無)あるゆえに私(わたくし)の言(ことば)をまじえず(雑)、きわめて正直(しょうじき)なるゆえ

に主の言をたがえず。第二よりもよきことにて候。あやまって第一にもすぐれて候なり。第一をば月支の四依にたとう。第二をば漢土の人師にたとう。第三をば末代の凡夫の中に愚癡にして正直なるものにたとう。

仏在世はしばらくこれをおく。仏の御入滅の次の日より一千年をば正法と申す。この正法一千年を二つにわかつ。前の五百年が間は小乗経ひろまらせ給う。ひろめし人々は迦葉・阿難等なり。後の五百年は、馬鳴・竜樹・無著・天親等、権大乗経を弘通せさせ給う。法華経をば

かたはしばかりかける論師もあり、またつやつや申しいだ
さぬ人もあり。正法一千年より後の論師の中には、少分は
仏説ににたれども、多分をあやまりあり。あやまりなくし
てしかもたらざるは、迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親
等なり。

像法に入って一千年、漢土に仏法わたりしかば、始めは
儒家と相論せしゆえにいとまなきかのゆえに、仏教の内の
大小・権実の沙汰なし。ようやく仏法流布せし上、月支よ
りかさねがさね仏法わたり来るほどに、前の人々はかしこ

きようなれども、後にわたる経論をもってみれば、はかなきことも出来す。また、はかなくおもいし人々もかしこくみゆることもありき。結句は十流になりて千万の義ありしかば、愚者はいずれにつくべしともみえず。智者とおぼしき人は辺執かぎりなし。しかれども、最極は一同の義あり。いわゆる、一代第一は華厳経、第二は涅槃経、第三は法華経。この義は、上一人より下万民にいたるまで異義なし。大聖とあおぎし法雲法師・智蔵法師等の十師の義一同なりしゆえなり。

しかるを、像法の中の陳・隋の代に、智顗と申す小僧あり。後には智者大師とごうす。法門多しといえども、詮ずるところ、法華・涅槃・華厳経の勝劣の一つばかりなり。智顗法師云わく「仏法さかさまなり」云々。陳主このことをたださんがために、南北十師の最頂たる慧暉僧正・慧曠僧都・慧栄・法歳法師等の百有余人を召し合わせられし時、「法華経の中には、『諸経の中において最もその上に在り』等云々。また云わく『已今当の説に最もこれ難信難解なり』等云々。已とは無量義経に云わく『摩訶般若・華厳海空』等

云々。当とは涅槃経に云わく『般若はら蜜より大涅槃を出だす』等云々。この経文は、華厳経・涅槃経には法華経勝ると見ゆること、赫々たり、明々たり。御会通あるべし」とせめしかば、あるいは口をとじ、あるいは悪口をはき、あるいは色をへんじなんどせしかども、陳主立って三拝し、百官掌をあわせしかば、力及ばずまけにき。

一代の中には第一法華経にてありしほどに、像法の後の五百に新訳の経論重ねてわたる。太宗皇帝の貞観三年に玄奘と申す人あり。月支に入って十七年、五天の仏法を習

極

いきわめて貞観十九年に漢土へわたりしが、深密経・瑜伽論・唯識論・法相宗をわたす。玄奘云わく「月支に宗々多しといえども、この宗第一なり」。太宗皇帝はまた漢土第一の賢王なり。玄奘を師とす。この宗の所詮に云わく「あるいは三乗方便・一乗真実。あるいは一乗方便・三乗真実」。また云わく「五性各別なり。決定性と無性の有情は永く仏に成らず」等云々。この義は天台宗と水火なり。しかも天台大師と章安大師は御入滅なりぬ。その已下の人々は人非人なり。すでに天台宗破れてみえしなり。

渡

見

その後、則天皇后の御世に華厳宗立つ。前に天台大師にせめられし六十巻の華厳経をばさしおきて、後に日照三蔵のわたせる新訳の華厳経八十巻をもって立てたり。この宗のせんにいわく「華厳経は根本法輪、法華経は枝末法輪」等云々。則天皇后は尼にておわせしが、内外典にこざかしき人なり。慢心たかくして、天台宗をさげおぼしてありしなり。法相といい、華厳宗といい、二重に法華経かくれさせ給う。

その後、玄宗皇帝の御宇に、月支より善無畏三蔵・金剛智三蔵・不空三蔵、大日経・金剛頂経・蘇悉地経と申す三経

をわたす。この三人は、人がらといい、法門といい、前々の漢土の人師には対すべくもなき人々なり。しかも前になかりし印と真言とをわたすゆえに、「仏法は已前にはこの国になかりけり」とおぼせしなり。この人々云わく「天台宗は華厳・法相・三論には勝れたり。しかれども、この真言経には及ばず」と云々。その後、妙楽大師は、天台大師のせめ給わざる法相宗・華厳宗・真言宗をせめ給いて候えども、天台大師のごとく公場にてせめ給わざれば、ただ闇夜のにしきのごとし。法華経になき印と真言と現前なるゆえ

に、皆人一同に真言まさりにてありしなり。

像法の中に日本国に仏法わたり、いわゆる欽明天皇の六年なり。欽明より桓武にいたるまで二百余年が間は、三論・成実・法相・倶舎・華厳・律の六宗弘通せり。真言宗は人王四十四代元正天皇の御宇にわたる。天台宗は人王第四十五代聖武天皇の御宇にわたる。しかれども、ひろまることなし。

桓武の御代に最澄法師、後には伝教大師とごうす。入唐已前に六宗を習いきわむる上、十五年が間、天台・真言の

二宗を山にこもりいて御覧ありき。入唐已前に天台宗をもって六宗をせめしかば、七大寺皆せめられて最澄の弟子となりぬ。六宗の義やぶれぬ。後、延暦二十三年に御入唐、同二十四年御帰朝。天台・真言の宗を日本国にひろめたり。ただし、勝劣のことは内心にこれを存して人に向かってとかざるか。

同じき代に空海という人あり。後には弘法大師とごうす。延暦二十三年に御入唐、大同三年御帰朝。ただ真言の一宗を習いわたす。この人の義に云わく「法華経はなお華厳経に

及ばず。いかにいわんや真言においてをや」。

伝教大師の御弟子に円仁という人あり。後に慈覚大師とごうす。去ぬる承和五年の御入唐、同十四年に御帰朝。十年が間、真言・天台の二宗をがくす。日本国にて伝教大師・義真・円澄に天台・真言の二宗を習いきわめたる上、漢土にわたりて十年が間、八箇の大徳にあいて真言を習い、宗叡・志遠等に値い給いて天台宗を習う。日本に帰朝して云わく「天台宗と真言宗とは同じく醍醐なり。ともに深秘なり」等云々。宣旨を申してこれにそう。

その後、円珍と申す人あり。後には智証大師とごうす。入唐已前には義真和尚の御弟子なり。日本国にして義真・円澄・円仁等の人々に天台・真言の二宗を習いきわめたり。その上、去ぬる仁寿三年に御入唐、貞観元年に御帰朝。七年が間、天台・真言の二宗を法全・良諝等の人々に習いきわむ。天台・真言の二宗の勝劣、鏡をかけたり。「後代に一定あらそいありなん、定むべし」と云って、「天台・真言の二宗は、譬えば、人の両の目、鳥の二つの翼のごとし」、この外、異義を存せん人々をば「祖師・伝教大師にそむく

人なり。山に住むべからず」と宣旨を申しそえて弘通せさせ給いき。されば、漢土・日本に智者多しというとも、この義をやぶる人はあるべからず。この義まことならば、習う人々は必ず仏にならせ給いぬらん。あがめさせ給う国王等は、必ず世安穏にありぬらんとおぼゆ。

ただし、予が愚案は、人に申すとも、御もちいあるべからざる上、身のあだとなるべし。またきかせ給う弟子檀那も安穏なるべからずとおもいし上、その義またたがわず。ただし、このことは一定仏意には叶わでもやあるらんとおぼ

え候。法華経一部八巻二十八品には、この経に勝れたる経おわせば、この法華経は十方の仏あつまりて大妄語をあつめさせ給えるなるべし。したがって、華厳・涅槃・般若・大日経・深密等の経々を見るに、「諸経の中において最もその上に在り」の明文をやぶりたる文なし。

したがって、善無畏等、玄奘等、弘法・慈覚・智証等、種々のたくみあれども、法華経を大日経に対してやぶりたる経文はいだし給わず。ただ印・真言ばかりの有無をゆえとせるなるべし。数百巻のふみをつくり、漢土・日本に往復

して無尽のたばかりをなし、宣旨を申しそえて人をおどされんよりは、経文分明ならばたれか疑いをなすべき。

つゆつもりて河となる、河つもりて大海となる、塵つもりて山となる、山かさなりて須弥山となれり。小事つもりて大事となる。いかにいわんや、このことは最も大事なり。疏をつくられけるにも、両方の道理・文証をつくさるべかりけるか。また宣旨も、両方を尋ね極めて、分明の証文をかきのせていましめあるべかりけるか。

「已今当」の経文は、仏すらやぶりがたし。いかにい

わんや、論師・人師・国王の威徳をもってやぶるべしや。「已今当」の経文をば、梵王・帝釈・日月・四天等、聴聞して各々の宮殿にかきとどめておわするなり。まことに「已今当」の経文を知らぬ人の有る時は先の人々の邪義はひろまりて失なきようにてはありとも、この経文をつよく立てて退転せざるこわもの出来しなば、大事出来すべし。いやしみて、あるいはのり、あるいは打ち、あるいはながし、あるいは命をたたんほどに、梵王・帝釈・日月・四天おこりあいて、この行者のかとうどをせんほどに、存外に天の

ろんじ　にんし　こくおう　いとく　破　い
きょうもん　ぼんのう　たいしゃく　にちがつ　してんとう　ちょうもん　いこん
おのおの　くでん　書　留
とう　きょうもん　し　ひと　あ　とき　さき　ひとびと　じゃぎ　広
とが　きょうもん　強　た
たいてん　強　しゅったい　だいじしゅったい　卑
罵　う　流
いのち　断　ぼんのう　たいしゃく　にちがつ　してん　起
合　ぎょうじゃ　方　人　ぞんがい　てん

責　きた
せめ来って、民もほろび、国もやぶれんか。法華経の行者
卑
はいやしけれども、守護する天こわし。例せば、修羅が日月
呑　こうべしちぶん　破
をのめば頭七分にわる、犬が師子をほゆればはらわたくさ
いま　よ　見　にほんこく
る。今、予みるに、日本国かくのごとし。またこれを供養せ
ひとびと　ほけきょうくょう　くどく
ん人々は法華経供養の功徳あるべし。伝教大師、釈して云
ほ　もの　ふく　あんみょう　つ
わく「讃むる者は福を安明に積み、謗る者は罪を無間に開
とううんぬん
く」等云々。
稗　飯　しゃくしぶつ　くょう　ひと　ふみょうにょらい
ひえのはんを辟支仏に供養せし人は普明如来となる。
土　餅　ほとけ　くょう　えんぶだい　おう
つちのもちいを仏に供養せしかば、閻浮提の王となれり。

たといこうをいたせども、まことならぬことを供養すれば、大悪とはなれども善とならず。たとい、心おろかに、すこしきの物なれども、まことの人に供養すればこう大なり。いかにいわんや、心ざしありて、まことの法を供養せん人々をや。

その上、当世は世みだれて民の力よわし。いとまなき時なれども、心ざしのゆくところ、山中の法華経へ、もうそうがたかんなをおくらせ給う。福田によきたねを下ろさせ給うか。なみだもとどまらず。